経済学の父アダム・スミスの人生哲学：『道徳情操論』を読む（下）

関西外国語大学教授・放送大学客員教授・神戸大学名誉教授
滝川好夫

目次

＜論文・上：項目１～１１６＞
第１部　行為の道徳的適正
第１編　道徳的適正感
　第１章　同情
　第２章　互いに同情し合うことによる快感
　第３章　性向の一致・不一致による、性向の道徳的適正・不適正の判断
　第４章　同じ問題の続き
　第５章　愛すべき・尊敬すべき美徳
第２編　道徳的適正に矛盾しない情感の程度
　第１章　身体に起源を持つ情感
　第２章　想像力の特殊の方向または習慣に起源を持つ情感
　第３章　非社会的情操
　第４章　社会的情操
　第５章　利己的情感
第３編　行為の道徳的適正に関する人々の判断に及ぼす繁栄・逆境の影響
　第１章　「悲しみ vs. 喜び」の当事者・他人の感覚作用
　第２章　野心の起源ならびに身分の区別
　第３章　「富者・偉人の賛美 vs. 貧困者・下賤者の軽蔑・無視」による道徳情操の頽廃

第２部　功績・罪過あるいは褒賞・処罰の対象
第１編　功績・罪過の感覚
　序論
　第１章　「感謝の対象は褒賞に価い vs. 報復感の対象は処罰に価い」という考え方
　第２章　感謝・報復感の対象
　第３章　恩恵を施す人の行為の是認と恩恵を受ける人の抱く感謝の気持ちに対する同情 vs. 危害を加えた人の動機の否認と危害のために苦しむ人の報復感に対する同情
　第４章　前述各章の総括
　第５章　功績・罪過の感覚
第２篇　正義と仁恵
　第１章　正義と仁恵の比較
　第２章　正義・悔恨の感覚ならびに功績の意識
　第３章　自然の摂理の効用

＜論文・中：項目１１７～１８８＞
第３篇　行為の功績・罪過に関して情操に及ぼす運の影響
　序論
　第１章　運がもたらす影響の諸原因
　第２章　運の与える影響の範囲
　第３章　情操の不規則性の起こる究極の原因

第３部　情操・行為に関する判断の基礎ならびに義務の感覚
　第１章　自己是認・自己否認の原理
　第２章　称讃・称讃に価いすることを愛し、非難・非難に価いすることを恐れる
　第３章　良心の作用と権威
　第４章　自己欺瞞の性質、一般原則の起源と利用
　第５章　道徳の一般原則の作用と権威、神の戒律とみなされることの正しさ
　第６章　義務の感覚：行為の唯一の原理 vs, 他の諸動機との作用

＜論文・下：項目１８９～３２９＞
第４部　是認の情操に及ぼす効用性の影響
　第１章　効用性の芸術作品に与える美、および美の及ぼす広範なる影響
　第２章　性格・行為に賦与される美の知覚と是認の根本原理

第５部　是認・否認の情操に及ぼす慣習・流行の影響
　第１章　美・醜に関する観念に及ぼす慣習・流行の影響
　第２章　道徳情操に及ぼす慣習・流行の影響

第６部　有徳の性格

第１編　幸福だけに作用を及ぼす個人の性格、慎慮
第２編　幸福だけに影響を及ぼすことの出来る個人の性格
　序論
　第１章　自然が個人を我々の配慮・注意に委ねる順序
　第２章　自然が社会を我々の仁恵に委ねる順序
　第３章　普遍的仁愛
第３編　自己統制

第６部の結論

　本論文は、「経済学の父」と呼ばれているアダム・スミスによって、１７５９年に出版された『道徳情操論（上・下）』にもとづいた「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活

指針」の論文である。

アダム・スミスと言えば、１７７６年に刊行された『国富論（諸国民の富の性質と原因に関する研究）』が有名である。学部時代にはさまざまな経済学古典書を読んだものであるが、より正確に言うならば、読んだ気になったものであるが、経済学研究者・教育者になってから、つねにひっかかかっているのは、それぞれの経済学に出てくる「人間」である。

経済学では「合理的人間」と呼ばれる人間が出てくるのであるが、いつも「合理的人間」とはどういう人間であるのかが気になっていた。あるいは、経済学にはロボット人間しかいないのではと思うこともあった。アダム・スミスと言えば、「見えざる手」が有名であり、それは人々が好き勝手にしていても、経済は市場メカニズム（価格メカニズム）によりうまく運営されるというものであるが、「見えざる手」は本当に好き勝手に行動している人間を想定しているのであろうかと疑問を抱いていた。

そこで、「経済学の父」と呼ばれているアダム・スミスの人間観を知りたいと思い、読み始めたのが上・下で合計７５２ページあるアダム・スミス『道徳情操論』（米林富男訳、未来社、１９６９年１０月）である。同書は Adam Smith, The Theory of Moral Sentiments, 1759 の翻訳であるが、訳書には、第１に第６版１７９０年、第２に副題「人々がまずもって隣人の行為と性格に関して、ついで自分自身の行為と性格に関して自然に判断を下す場合における諸原理の分析を目的とする一試論」、第３にグラスゴウ大学道徳哲学教授　法学博士　アダム・スミス著と書かれている。

アダム・スミス『道徳情操論』を１度、２度、３度と繰り返し読んでいると、私の人生を回顧させられ、また日々の生活を反省させられる記述が多々あり、これほど「腑に落ちた」本を読んだのははじめてである。これはもはや経済学の、あるいは経済学に出てくる人間を知ろうとして読む本ではなく、「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活指針」の本であると強く確信するようになった。

本論文は、偉大なアダム・スミスの、名著『道徳情操論』の内容を、同書の目次構成のまま（ただし、「第７部　道徳哲学の諸学説について」「附録　言語起源論」は割愛）、３２９の項目を作成して紹介するものであり、「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活指針」の本として読むとき「腑に落ちる」ことばかりであると期待している。本論文が「ビジネス見直し」「人生見直し」「生活見直し」に役立つことを願っている。『道徳情操論』のすばらしさ、しかも「ビジネス倫理本」「人生哲学本」「生活指針本」としてのすばらしさを知ってもらいたいと思い、本論文執筆を企図した。

第４部　是認の情操に及ぼす効用性の影響について

第１章　効用性の出現があらゆる芸術作品に与える美について、またこのような種類の美の及ぼす広範なる影響について

１８９　モノの非所有者は所有者の情操への移入によって効用を得る。

スミスは、「あらゆる物体の効用性は、その物体の所有主に対して、その物体が促進

するにふさわしい快感もしくは便益をたえず暗示することによって、その所有主を喜ばせる。その物体を眺める場合にはいつもかれはこの快感を思い出す。（中略）見物人は同情によってその所有主の情操に移入し、必然的にその物体を同一の快的な側面から眺めるようになる。」（訳書 p.386）と述べている。つまり、モノの所有者はモノの効用（快感もしくは便益）がたえず暗示されていることによって喜びを感じ、モノの非所有者は所有者の情操への移入によって効用を得る。

１９０　老年期の「人為的な高貴な安穏の生活」の満足感は若年期に犠牲にした「つつましやかな安全と満足」よりも劣っている。

　若年期には将来「人為的な高貴な安穏の生活」を送りたいという夢があり、そのために、日々の「真の平静」を犠牲にしている。しかし、老年期になっても「人為的な高貴な安穏の生活」を送れるようになることは困難であり、もしかりに送れるようになったとしても、そのときの「人為的な高貴な安穏の生活」の満足感は若年期に犠牲にした「つつましやかな安全と満足」「気楽さ・呑気さ」よりも劣っている。

１９１　富貴権勢の人の境遇を感嘆の念をもって眺めているのは幸福をもたらしている精緻な人為的手段である。

　我々はなぜ富貴権勢の人の境遇を感嘆の念をもって眺めているのか。我々が眺めているのは、富貴権勢の人の安楽・快楽ではなく、安楽・快楽を促進している精緻な人為的諸工夫である。

１９２　想像力は、苦しいときは自分一身の範囲内に限定され、楽しいときは自分を取り巻くあらゆるものに拡がる。

　我々の想像力は、苦痛と悲哀の下では自分一身の範囲内に限定され、安楽な順境にあるときは、自分を取り巻くあらゆるものを超えて拡ってゆく。

１９３　身体の安楽と心の平和の点では、生活階層の下位と上位はほとんど同じである。

　真の幸福を形造るものに関しては、生活階層の下位と上位はほとんど同じである。身体の安楽と心の平和の点では、異なる生活階層にある人々はお互いにほとんど同一の水準である。

第２章　効用性の出現のために人々の性格ならびに行為に賦与せられる美について、また、いかなる程度までかような美の知覚を、是認の根本原理の一つと看なしていいか、ということについて

１９４　慎重な性格・公正な性格・活動的な性格・決断力の強い性格は真面目な性格であり、無分別な性格・横柄な性格・怠惰な性格・柔弱な性格は真面目でない性格である。

　慎重な性格・公正な性格・活動的な性格・決断力の強い性格は「真面目な性格」であり、無分別な性格・横柄な性格・怠惰な性格・柔弱な性格は「真面目でない性格」であ

る。「真面目な性格」は自身にとっても、その人と関係のあるすべての人々にとっても繁栄と満足をもらたすが、「真面目でない性格」は自身にとっても、その人と関係のあるすべての人々にとっても破壊と不幸をもたらす。

１９５　慎慮の美徳は最も有用な美徳であり、「理性」「悟性」「自己統制」の結合によって慎慮の美徳が成立する。
　「理性」「悟性」「自己統制」の３つは有用な性質であり、それらの結合によって慎慮の美徳が成立する。慎慮の美徳はあらゆる美徳のうちでも個人にとっては最も有用な美徳である

１９６　「人間愛」は女子の美徳であり、「寛容」は男子の美徳である。
　「人間愛」は女子の美徳であり、「寛容」は男子の美徳である。「人間愛」は、苦楽をしている当事者の情操に対して、「公平無私なる見物人」が抱くきわめて繊細な同類感情であり、公平無私なる見物人が当事者の不運に対して悲しみ、当事者の幸運に対して喜びを感じることである。「寛容」は我々が我々自身よりもある他人を尊重し、我々自身の利害をある他人のために犠牲にすることである。

１９７　特攻隊員は、公平無私なる見物人の視点から、自分の生命よりも、自国のために他国を攻撃し自国民を護るほうが一層重要であると考えている。
　特攻隊員は「寛容」の例示である。特攻隊員は、自分自身にとっては、自分の生命の方が自分が奉仕する自国のために他国を攻撃するよりもはるかに貴重であることを認識している。しかし、特攻隊員は、自身の視点ではなく、公平無私なる見物人の視点から、自分の生命よりも、自国のために他国を攻撃し自国民を護るほうが一層重要であると考えて、自分の生命を賭する。

第５部　是認ならびに否認の情操に及ぼす慣習と流行の影響について

第１章　美ならびに醜に関するわれわれの観念に及ぼす慣習と流行の影響について

１９８　道徳情操は「慣習」と「流行」によって異なる。
　何が非難されるべきであり、何が賞讃されるべきであるかという道徳情操は、時代が異なれば、あるいは国民が異なれば、「慣習」と「流行」によって異なる。

１９９　芸術作品の価値は理性・本性ではなく、慣習・流行に依存している。

２００　いったん慣習が特定の原則を確立すると、その特定の原則を変更することは難しい。
　いったん慣習が特定の原則を確立してしまえば、その原則が絶対に不合理なものでな

ければ、その特定の原則を変更することは難しい。

２０１　優れた絵画は実物よりも「実物らしい」ことがある。
　同じ人物を対象として描いた絵画の中には、優れたものも、劣っているものもあるが、どれも同じ人物との類似性はある。優れた絵画と劣っている絵画の類似性は、複数の劣っている絵画相互の類似性よりも大きい。優れた絵画はその人物の特徴をうまくとらえているので、実物よりも「実物らしい」と思えるのかもしれない。

第２章　道徳情操に及ぼす慣習ならびに流行の影響について

２０２　慣習・流行は正邪に関する自然の原理に一致する場合には、道徳情操の繊細さを一層高める。
　慣習・流行が正邪に関する自然の原理に一致する場合には、慣習・流行は道徳情操の繊細さを一層高める。邪悪に対する嫌悪感は、「真に善良な仲間の間で教育された人々」「自分達が尊敬し、いっしょに生活している人々のうちに正義・謙譲・人間愛ならびに秩序愛しか見ないように慣らされている人々」は強いが、「不幸にも暴力・放縦・虚偽ならびに不正の真只中に育った人々」は弱い。

２０３　流行は無秩序の評価を高め、秩序の評価を低めることがある。
　時によるとであるが、流行は無秩序の評価を高め、秩序の評価を低める。

２０４　上層階級の美徳は自由と独立の精神、寛容などであり、下層階級の美徳は骨の折れる勤勉、規則の厳守などである。
　上層階級の美徳は自由と独立の精神、淡泊、寛容、人間愛、鄭重などであり、下層階級の美徳はしみったれた節倹、骨の折れる勤勉、規則の厳守などである。

２０５　高齢者が高齢者の特色を持ち過ぎても、若齢者が若齢者の特色を持ち過ぎても不愉快である。
　一生涯の異なる時期はそれぞれに特有の風習を持っている。高齢者は病弱、長い人生経験、使い古されて鈍くなった感受性、重々しい威厳、沈着など、若齢者は感受性、陽気さ、快活さ、敏感なそして未熟練の諸感覚などによってそれぞれ特色づけられている。高齢者が高齢者の特色を持ち過ぎて冷然たる無感覚になっても、若齢者が若齢者の特色を持ち過ぎてふざけた軽薄になっても、いずれも不愉快である。

２０６　高齢者は沈着な若齢者に、若齢者は若々しい高齢者に快感を感じている。
　各人は異なった情感に慣れているが、「中庸」に特別の快感を感ずる。若齢者は高齢者に許されている「極度の冷淡と鈍感な堅苦しさ」を軽蔑し、逆に高齢者は若齢者に許されている「軽薄・向こう見ず・虚栄」を軽蔑し、高齢者と若齢者はそれぞれ「中庸」、つまり「沈着な若齢者」「若々しい高齢者」に特別の快感を感じている。

２０７　深い悲しみに対して、一般人であれば涙脆さを示しても非難されないが、リーダーであれば涙脆さを示すと非難される。
　たった一人の子供を失ったとき父親が、一般人であればいかに深い悲しみと涙脆さを示しても非難されないが、陣頭に立っている将軍であれば同じ程度の深い悲しみと涙脆さを示すと非難される。

２０８　いかなる程度の性格が責められるべきであるか、あるいは褒められるべきであるかは時代、国、境遇によって異なる。
　人の性格は、時代、国、境遇が異なれば、異なる。いかなる程度の性格が責められるべきであるか、あるいは褒められるべきであるかは時代、国、境遇によって異なる。

２０９　文明人は人間愛にもとづく諸美徳を、野蛮人は自己否定にもとづく諸美徳を錬磨している。
　文明民族は人間愛にもとづく諸美徳を、野蛮民族は自己否定にもとづく諸美徳をそれぞれより一層錬磨している。

２１０　困難に慣れている人は困難のために刺激されやすい情感に対して譲歩しないように教育されている。
　困難な諸事情に取り巻かれている人は、あらゆる種類の困難に慣れさせられ、そのような困難のために刺激されやすい情感に対して譲歩しないように教育されている。

２１１　他人に寛容でありうるためには、我々が安心して落ち着いていなければならない。
　他人に同情し、寛容でありうるためには、我々が自らある程度まで安心して落ち着いていなければならない。我々が不幸のために非常にきびしく苦しめられているならば、我々は何ら隣人の不幸に対して注意を払う余裕を持てない。あるいは、隣人たちが困難な状況に直面していれば、我々の不幸に対して隣人から何らの同情も、何らの寛容も期待することはできない。むしろ、隣人に対して弱みを見せることは、嘲笑を招くと思うのである。

２１２　我々は、知らない人の前よりは、知っている人の前でより一層強く情緒を表現する。
　我々は、知らない人よりも、知っている人からより一層の寛大な取り扱いを受けることができるので、知らない人の前よりは、知っている人の前でより一層強く情緒を表現する。

第６部　有徳の性格について

第１編　当人自身の幸福だけに作用を及ぼす個人の性格について、あるいは慎慮について

２１３　自然は個人が身体保全と健康状態に注意を払うように勧奨している。
　自然は、個人の身体保全と健康状態のために、飢渇に関する欲望、快苦・寒暑に関する感覚などが、個人が何を選択しなければならないか、あるいは何を回避しなければならないかを指示している。

２１４　同じ階層の人々から受ける尊敬は、本人が所有している必要品・便宜品と本人の性格・行為に依存している。
　同じ階層の人々から受ける尊敬ないし同じ階層における立ち位置は、１つは本人が所有している、あるいは所有していると人々から想像される「外部的財産」の便益（必要品・便宜品）、もう１つは本人の性格・行為に依存している。

２１５　慎重な人と交流するときは積極的に質問をしなければならない。
　慎重な人は第１に誠実であるが、率直で、開放的であるとは限らない、第２に行動するときは用心深く、話をするときは遠慮勝ちであるので、慎重な人と交流するときは積極的に質問をしなければならない。

２１６　慎重な人は、名声を高めるためには、自分の堅実な知識と能力に頼ろうとする。
　慎重な人は、結社（クラブ）の好意を迎えるために運動しようなどとは考えず、名声を高めるためには、自分の堅実な知識と能力に大いに頼ろうとする傾向がある。

２１７　友達を選ぶときには、謙譲、思慮分別、善行に対して抱く厳粛なる尊敬の念を指針とすべきである。
　友達を選ぶときには、輝かしい業績に眩惑されて抱く感嘆の念を指針としないで、謙譲、思慮分別、善行に対して抱く厳粛なる尊敬の念を指針とすべきである。

２１８　「友情を感ずる」と「一般的社交性に富んでいる」は別物である。
　友情は堅実にして真心のこもった愛着の心であるが、「友情を感ずる」と「一般的社交性に富んでいる」は別物である。

２１９　慎慮はある種の冷たい尊敬の念を起こさせるが、熱烈な愛情あるいは感嘆を受けるだけの資格はない。
　慎重な人は将来の、長い期間持続するより一層大なる安楽と享楽を得られるであろうという期待の下に、現在の瞬間における安逸と享楽を我慢して犠牲にする、つまり現在の価値より将来の価値をより重視する。個人の健康、財産、地位、名誉等に対する慎慮

はある種の冷たい尊敬の念を起こさせるが、熱烈な愛情あるいは感嘆を受けるだけの資格はない。

２２０　高尚なる目的を目指している賢明にして思慮ある行為は完全な美徳と完全な叡知を結合したものである。
「個人の健康、財産、地位、名誉等に対する慎慮」よりも、より一層偉大なる、より一層高尚なる目的を目指している賢明にして思慮ある行為は「上級の慎慮」と呼ばれ、上級の慎慮は最も完全な美徳と最も完全な叡知を結合したものである。

２２１　軽挙は他の悪徳と結び付いた場合には、憎悪・憤怒の対象になる。
軽挙は、一方で寛大な人や人情味の豊かな人の眼には同情の対象、他方でそれほど繊細でない情操の持ち主の眼には無視の対象あるいは軽蔑の対象にそれぞれなる。軽挙は憎悪・憤怒の対象にはならないが、他の悪徳と結び付いた場合には、憎悪・憤怒の対象になる。

第２編　他の人々の幸福だけに影響を及ぼすことの出来る個人の性格について

序論

２２２　我々が他人の幸福にマイナスの影響を与えうるのは不正に対する道徳的に適正な報復感のみである。
個人の性格は他人の幸福へプラスあるいはマイナスの影響を及ぼす。我々の性格が他人の幸福にマイナスの影響を与えうる唯一の動機は不正に対する道徳的に適正な報復感のみである。

第１章　自然が個人をわれわれの配慮と注意に委ねる場合の順序について

２２３　他人の快楽・苦痛よりも、我々自身の快楽・苦痛の方を一層敏感に感ずるものである。
我々自身の快楽・苦痛は他人の快楽・苦痛よりも一層敏感に感ずるものである。我々は、他人の世話を焼くよりも我々自身の世話を焼くことの方があらゆる点において一層適しており、また一層上手である。

２２４　我々は家族に同情するように習慣づけられている。
家族（平素同じ家の中で一緒に生活している人々）は自然に、そしてつねに最も温かな愛情の対象であり、我々の行為が最も大きな影響を及ぼす人々である。我々は家族に同情するように習慣づけられている。

２２５　同情にもとづく愛着心は、両親に対するよりも子供に対してより強い。
　同情ならびに同情にもとづく愛着心は、両親に対するよりも子供に対してより強い。

２２６　将来の担い手は子供であるので、子供を重視しなければならない。
　スミスは、「普通の場合にあっては、老人が死んでも誰も大して悔やまない。しかるに子供が死ぬと、誰かが断腸の思いをしないではおられないのである。」（訳書 p.468）と述べている。将来の担い手は子供であるので、子供は老人よりも期待される、あるいは希望がつながれる。

２２７　兄弟姉妹間の同情は共通の幸福にとってきわめて重要である。
　兄弟姉妹との関係は最初の友人関係であり、兄弟姉妹間の同情は共通の幸福にとってきわめて重要である。同じ境遇が兄弟姉妹に対してお互いに仲良くしなければならない義務を感じさせ、その結果兄弟姉妹相互間の同情はより一層習慣的となる。

２２８　同情が習慣的になる度合いはいとこ同士は兄弟姉妹同士よりも弱い。
　いとこ同士は、兄弟姉妹（いとこの両親）の間に存続している人間関係によって自然に結合させられる。しかし、同情の程度や同情が習慣的になる度合いはいとこ同士は兄弟姉妹同士よりもはるかに弱い。

２２９　愛着心は血縁関係がますます遠くなるに従って減退する。
　愛着心は、幸福を増進し、不幸を防止したいといった習慣的同情である。子供、両親、兄弟姉妹、兄弟姉妹の子供（従兄弟姉妹）、従兄弟姉妹の子供の順番で、血縁関係がますます遠くなるに従って、愛着心は減退する。

２３０　「親としての慈愛を示さない両親」や「子として尽くすべき孝行の心をすこしも持たない子供」は道徳的不適正である。
　血縁関係をもって結ばれている人々は、互いに愛着を感じ合わなければならない。「親としての慈愛を示さない両親」や「子として尽くすべき孝行の心をすこしも持たない子供」は道徳的に不適正であり、単に憎悪の対象としてばかりでなく、恐怖の対象として映ずる。

２３１　別居中の父子、兄弟または姉妹は、義務感の強い有徳の人であれば自然的愛着心とよく似たある種の感情を持つが、道楽者・放蕩者・虚栄心の強い人間であればお互いに疎遠の間柄に陥らざるをえない。
　別居中の父子、兄弟または姉妹は、長い間一緒に家族生活を行ってきた人々の会話のうちに自然に発生する心からの満足、甘美な同情、自信に満ちた寛大と気楽さを完全に楽しむことはできない。別居中の父子、兄弟または姉妹は、義務感の強い有徳の人であれば、一般原則を尊重する結果、自然的愛着心と決して同一ではないにしても、非常によく似たある種の感情を持つ。道楽者、放蕩者ならびに虚栄心の強い人間であれば、一

般原則を完全に無視し、必ずお互いに最も完全な疎遠の間柄に陥らざるをえない。

２３２　親子が離れて生活することになる学校教育は、家庭道徳を破壊し、家庭の幸福を破壊する。

スミスは、家庭教育は自然の制度、学校教育は人間の発明であると論じ、「諸君は自分の子供を親に対して孝行な、兄弟姉妹に対して親切で愛情の豊かな人間に教育したいとは思わないか。もしもそのように教育したいと思うならば、自分の子供を孝行息子にならざるをえないような、また親切な、愛情の豊かな兄弟姉妹にならざるをえないような状態に置け。すなわちかれを諸君自身の家庭で教育せよ。かれらは自分達の両親の家から、毎日礼儀正しく、しかも都合好く（普通教育を受ける為に）公立学校に通学するであろう。」（訳書 pp.472-473）と述べている。スミスの時代と現在は教育制度が異なっていることを踏まえた上での理解であるが、スミスの勧める「家庭教育」は親子、兄弟姉妹が一緒に生活しながら、学校に通うことを意味するものである。

２３３　「血縁の力」は存在しない。

立派な親類関係は家族的自尊心を昂揚させるが、それは愛着心のためではなく、虚栄のためである。法律の権威が完全な安全性を保障するに充分でない時代は、同一の家族から別れて出たそれぞれの異なる分家はすべて相互に近接して生活し、分家の連合は共同防衛のために必要不可欠であるが、法律の権威が完全な安全性を保障する時代は、同一の家族から別れて出たそれぞれの異なる分家は一カ所に固まるための動機を何ら持っていないので、利害関係もしくは性向の命ずるままに、自然に分離し、四散する。

２３４　自然的愛着心は道徳的結合の所産である。

自然的愛着心は、親子の間における生理的結合の所産であるよりは、むしろ道徳的結合の所産である。気立てのいい人々、理性のすぐれた人々は、自然に協力一致しようとする傾向がある。

２３５　近隣の人々は便利なものであり、また厄介なものである。

近隣の人々は、お互いにとってきわめて便利なものになることができるとともに、またきわめて厄介なものになることもある。

２３６　良い友達からも、悪い友達からも感染される。

良い友達であろうが、悪い友達であろうが、友達間では、深く根を張っているように思われる情操・原理・感情はできるだけ調和され、同化させられる自然の性向がある。相互理解といえばそうであるが、やはり良い友達からも、悪い友達からも感染される。二人の間だけに友情を限ろうとする人々は、愛情にともなう嫉妬・愚昧のために、友情にともなう賢明なる安全感を掻き乱す。

２３７　豊富な経験と長い交際とによって裏付けられた愛慕は尊敬すべきものである。

豊富な経験と長い交際とによって裏付けられた愛慕こそは、何にたとえようもない最も尊敬すべきものである。美徳を愛する心にもとづく愛慕の情は、あらゆる愛慕のうちでも、最も奥ゆかしい愛慕、最も幸福な愛慕、最も恒久的な愛慕、最も安全な愛慕である

２３８　有徳の士だけがお互いの行為に絶対の信頼を感ずることができる。

有徳の人々の間の友情は自ら愛着心を感ずる人が尊敬の対象であるという無意識の感情である。有徳の士だけがお互いの行為に絶対の信頼を感ずることができる。

２３９　悪徳はつねに気まぐれであり、美徳は規律・秩序を維持している。

２４０　若い者同志の親交は気まぐれをもって始まり、気まぐれをもって終わる親交である。

若い者同志の親交は、善行とは全く無関係のちょっとした性格の類似性（例えば、同一の趣味）あるいは一般に採用されていないある独特の原理または意見に関する見解の一致に基づくものである。若い者同志の親交は、第１に性急な他愛のない愚かな親交であり、第２に気まぐれをもって始まり、気まぐれをもって終わる親交であり、第３にいかに愉しそうに見えようとも、決して友情という神聖な、尊敬すべき名称に価いする親交ではない。

２４１　親切は親切の母である。

スミスは「親切は親切の母である。」（訳書 p.479）と述べている。お互いに親切にし合うことが人々の幸福にとって必要不可欠である。

２４２　同胞に愛されるためには自らの行為によって真に愛しているということを示すことである。

同胞に愛されることを目標とするのであれば、目標を達成する最も確実な方法は、自分の行為によって、同胞を真に愛しているということを示すことである。

２４３　社会の平和と秩序は悲惨な人々の救済よりもはるかに重要である。

２４４　偉人に対する過度の尊敬あるいは貧困者に対する同類感情の欠如は人々を怒らせる。

偉人に対する過度の尊敬あるいは貧困者に対する同類感情の欠如は人々を怒らせる傾向が強い。道徳家達は慈善と同憂を鼓吹している。

第２章　自然が社会をわれわれの仁恵に委ねる場合の順序について

２４５　人々の繁栄と安全は社会の繁栄と安全に依存している。

人々の繁栄と安全は社会の繁栄と安全に依存している。我々の社会を他の同種類の社会と比較するとき、優れていれば我々は誇りを感じ、劣っていれば我々は屈辱を感じる。

２４６　愛国者は最も厳密な道徳的適正をもって行動するように見える。

愛国者は最も厳密な道徳的適正をもって行動するように見える。愛国者は、大多数の人々の安全のために、大多数の人々への奉仕のために、大多数の人々の名誉のために、自己を敢えて犠牲にする人である。愛国者の行為は我々の最高の驚異と感嘆を刺激し、最も英雄的な美徳に対して正当に払うことのできるあらゆる称賛に価する功績をもつ。

２４７　反逆者の行為はあらゆる悪党の行為のうちでも最も唾棄すべきものである。

反逆者は、非常に破廉恥に、また非常に卑劣に、彼が何らかの結合関係を有しているあらゆる人々を犠牲にして、自分自身を生かそうとする人である。反逆者の行為はあらゆる悪党の行為のうちでも最も唾棄すべきものである。

２４８　人類愛にもとづいて、隣接の他国民の優越を助長するように努力しなければならない。

国民的偏見は卑劣な原理であるが、それは自国に対する愛情という高貴な原理を基礎としている。我々は、自国民に対する愛情のために、しばしば最も悪意に満ちた嫉妬と羨望を抱いて、隣接の他国民の繁栄と生長を眺める傾向がある。しかし、隣接の他国民の諸改良はすべて国民間の競争の適正な対象であり、国民的偏見もしくは嫉妬の対象ではない。人類愛にもとづいて、隣接の他国民の優越を妨害しないで、むしろ助長するように努力しなければならない。

２４９　祖国愛は人類愛と無関係である。

祖国愛は人類愛とまったく無関係である。祖国愛は政治の原則に対する尊重と同胞市民達の生活状態を幸福にしてやろうという願望の２つの異なる原理を含み、２つの原理は、秩序のある時代には一致し、秩序のない時代には一致しない。近い国々を非常に薄弱な根拠にもとづき愚かにも国民的仇敵と呼ぶことはあるが、遠い国の繁栄に対してはいかなる種類の嫉妬心をも抱かない。

２５０　政党は、理想的制度を夢に描いて、その美しさに陶酔させられている。

政党指導者の仕事は不幸の種となっている不便を取り除き、不幸を救済することである。政党指導者は、元来自身の名声を上げることしか考えていなかったかも知れないが、やがて自身の詭弁に欺かれて、国家改革案（憲法の改正と政治体制の変革）に夢中になってしまう。

２５１　政治の対立が節度をもって行われるならば救治の望みはある。

政治の対立（与野党の対決）はしばしばあらゆる妥協、あらゆる調整、あらゆる和解を排してあまりに多くを要求するために、何物をも得ないことがある。政治の対立が節

度をもって行われるならば不幸の種となっている不便を取り除き、不幸を救済することになる。

２５２　主義の人と社会の構成員が同一方向に向かって行動するならば、社会は円滑に進められる。
　主義の人は非常な賢人ぶりを発揮したがる。主義の人と社会の構成員の運動原理が一致して同一方向に向かって行動するならば、社会は円滑に調和的に進められる。主義の人と社会の構成員の運動原理が異なっていれば、社会は終始この上もない混乱状態に陥る。

第３章　普遍的仁愛について

２５３　好意・悪意の地理的影響範囲は限られていない。
　効果的な世話の地理的影響範囲は限られているが、好意・悪意の地理的影響範囲は限られていない。

２５４　賢明な有徳の人はつねにすすんで自らの私的利益を犠牲にする。
　賢明な有徳の人は、つねにすすんで自らの私的利益を、自らの属する特定の階級の利益または社会全体の利益のために犠牲にする。

第３編　自己統制について

２５５　慎慮、正義、仁愛に関する知識を有していても、自己統制できない人は実践できない。
　慎慮、正義、仁愛といった諸原則に関する知識を有していても、自己統制できない人はそれらの諸原則に基づいて行動できない。「有徳の士」は慎慮、正義、仁愛といった諸原則に関する最も完全な知識をもっているのみならず、それらの諸原則に基づいて実際に行動する人である。

２５６　測り知れぬ恐怖と猛り狂う憤怒の抑制には相当の自己統制力を働かす必要がある。
　測り知れぬ恐怖と猛り狂う憤怒は、一瞬間といえどもそれを抑制することは困難であり、抑制のためには相当の自己統制力を働かす必要がある。測り知れぬ恐怖と猛り狂う憤怒の統制は、堅忍不抜性、剛毅性、力強い精神力を示すものである。

２５７　安逸・快楽・称讃は短期間ならば抑制することは容易である。
　安逸・快楽・称讃などの情感に絶えず誘惑されていると、しばしば誤った方向へ導かれ、あとで考えると非常に恥ずかしい思いをさせられる。安逸・快楽・称讃などは、一瞬間または短期間ならばそれを抑制することは容易であり、安逸・快楽・称讃などの統

制は、節制・端正・謙遜・中庸を示すものである。

２５８　自己統制は尊敬と感嘆を払う価値がある。
　自己統制は、それ自体の美を有し、それ自体のためにある程度の尊敬と感嘆を払う価値がある。危険に陥ったり、死期の切迫したりしている人間が、その落ち着きを相変わらず失わない状態は、人々に必然的に非常に高い程度の感嘆を起こさせる。

２５９　死の恐怖を克服した人は冷静を失うようなことはない。
　死は恐怖の王者である。死の恐怖を克服した人は、他のいかなる災厄が切迫しても、冷静を失うようなことはない。恐怖の統制はつねに偉大なしかも高貴な精神力の成果である。最も恐るべき危険に臨んで平静を維持し、沈着を失わない人の性格は感嘆すべき性格である。

２６０　深刻に怒らせた人に対して怨恨を捨て、信頼をもって行動しうる人は感嘆を払うだけの功績をもっている。
　程度を超える荒れ狂う騒々しい情感は不愉快であり、怒っている人に対してではなく、憤怒の対象になっている人に対して、我々に同情的関心を抱かせる。深刻に怒らせた人に対して、あらゆる怨恨をさらりと捨てて、信頼・誠実をもって行動しうる人は、最高の感嘆を払うだけの功績をもっている。憤怒の統制は、つねに偉大なしかも高貴な精神力の成果である。

２６１　虚栄心の強い、意志の弱い人は激しく感動する。
　虚栄心の強い、意志の弱い人は、これ見よがしに激しく感動することによって「ご機嫌が悪いぞ」ということを見せびらかせると思っている。

２６２　正義・仁愛にもとづく憤怒の統制は美徳である。
　正義と仁愛にもとづく憤怒の統制は美徳である。礼節の感覚、威厳の感覚、道徳的適正の感覚にもとづいた「憤怒の統制」は気持ちのよいものである。

２６３　困難のまっ只中にあって冷静な落ち着きをもって行動することは徳性のもつ特徴である。
　大きな危険や困難のまっ只中にあって冷静な落ち着きをもって行動することは、気高い知性と徳性のもつ特徴である。

２６４　愉快な情感は過多の方が、不愉快な情感は過少の方がよい。
　同情しやすい情感、当事者にとって気持ちのいい情感は、過多の方が過少よりも不愉快ではない。同情しにくい情感、当事者にとって不愉快な情感は、過少の方が過多よりも不愉快ではない。

２６５　人間愛は人々を結合させる性向であり、過度になっても、人々に好印象を与える。
　人間愛・親切・自然的愛着・友情・尊敬等は人々を結合させる性向である。人々を社会において結合させようとする性向は過度になっても、人々に好印象を与え、当人にとって愉快である。

２６６　憤怒は人々を分断させる性向であり、過度になれば、人々を憤慨させる。
　憤怒・憎悪・嫉妬・敵意・復讐等は人々を分断させる性向である。人々を分断させる性向は過度になれば、人々を憤慨させ、当人をして自ら心の中でみすぼらしさ、みじめさを感じさせる。

２６７　「適正なる憤激」の欠如は本質的な欠陥である。
　「適正なる憤激」の欠如は雄々しい性格の人にとっては本質的な欠陥である。

２６８　嫉妬は忌まわしい嫌悪すべき情感である。
　嫉妬は、人々の有する優位性に対して、それらの人々が実際に優位性をもつ資格があるにかかわらず、悪意に満ちた嫌悪の情をもってそれを眺めようとする情感であり、忌まわしい嫌悪すべき情感である。

２６９　臆病は軽蔑すべき性格である。
　臆病は軽蔑すべき性格である。臆病の原因は怠惰であり、人の良さである。臆病の源泉は反抗・混雑・懇願に対する嫌悪であり、見当違いの大度（広くて大きい度量）であるが、臆病は遺憾と後悔を伴うのが普通である。

２７０　世の中で愉快に生活するためには生命、財産、尊厳、社会的地位が必要である。
　世の中で愉快に生活するためには、自分の生命または自分の財産を護ることが必要であると同様に、自己の尊厳と社会的地位とを護ることもまた必要である。

２７１　感受性は鈍感であるよりも敏感であることに悩まされる。
　自己一身上の危険・不幸に対する感受性、自分の人格に加えられた侮辱に対する感受性は、その欠如のためよりもその過度のために悩まされる場合の方がはるかに多い。つまり、感受性は鈍感であるよりも敏感であることに悩まされる。

２７２　苦痛に耐えることができる人は尊敬されるが、耐えることができない人は尊敬されない。
　苦痛に耐えることができる人は尊敬されるが、苦痛に耐えることができない人は尊敬されない。

２７３　瑣細な災厄に対して鋭敏な人は、自己にとってはみじめであり、他人にとって

は不愉快である。
　瑣細な災厄に対して非常に鋭敏な人は、自己にとってはみじめなものであり、他人にとっては不愉快である。瑣細な侵害を受けたり、小さな災難を蒙ったりしても心の平静を取り乱さず、自然的害悪ならびに道徳的害悪に苦しめられても落ち着いている気質は、自身にとっても幸福であり、また他人に対しても安全感を与える。

２７４　自分自身の不幸をほとんど感じない人は、他人の不幸に対しても感受性が鈍く、彼らを救おうという気持ちになりにくい。
　自己の危害に対する感受性の弱い人、つまり自分自身に加えられた危害に対してほとんど報復感を感じない人は、他人に加えられた危害に対しても報復感を感ずることが少なく、危害を加えられている人を保護しようとしたり、あるいは彼らのために復讐しようとしたりする気持ちになりにくい。自己の不幸に対する感受性の弱い人、つまり自分自身の不幸をほとんど感じない人は、他人の不幸に対しても感受性が鈍く、彼らを救おうという気持ちになりにくい。

２７５　出来事に対して無関心であることは道徳的適正に対する配慮を消滅させる。
　人生における諸々の出来事に対して鈍感（無関心）であることは道徳的適正に対するあらゆる鋭い熱心な配慮を消滅させる。

２７６　真の有徳の士のみが愛と尊敬と感嘆の対象である。
　真の有徳の士のみが愛と尊敬と感嘆の真実にして適正な対象である。「真の有徳の士」は「自身に降りかかった災難に関して悲しみを感じる人」「自身に加えられた不正のもつ下劣さを感じる人」「自身の性格の尊厳が要求するところのものを強く感じる人」「自身の境遇のために自然に湧き起こるかも知れない未訓練の諸情感の命ずるままに身を任せない人」「抑制され矯正されたる諸情緒にしたがって自己の全行動ならびに行為を統制する人」である。

２７７　危害に対する感受性の欠如は自己統制の功績を奪い去ってしまう。
　一身上に加えられた危害に対する感受性は、過度に繊細になる可能性があり、また実際に過度に繊細になる。一身上に加えられた危害に対する感受性の欠如は、あらゆる自己統制の功績を奪い去ってしまうかも知れない。

２７８　道徳的適正感が感受性を統制しうる場合には、道徳的適正感は高貴・偉大に見える。
　道徳的適正感を働かせることは難しい。しかし、道徳的適正感（あるいは胸中に潜む裁判官の権威）が極端な感受性を統制しうる場合には、道徳的適正感は非常に高貴に、また非常に偉大に見える。

２７９　侵害に対して非常に敏感な人は党派争いに参加しない。

侵害に対して非常に敏感な人は、軽率に党派争いに参加しない。

２８０　神経の太さは自己統制作用にとって最善の準備手段である。
心の落ち着きはつねに撹乱され、判断はつねに正確さを保つことができない。大胆、神経の太さ、体質の堅牢さは自己統制作用にとって最善の準備手段である。

２８１　戦争・内乱はしっかりした気質を植えつけるための最善の道場である。
戦争・内乱は鞏固なしっかりした気質を植えつけるための最善の道場であり、また弱さを治す最上の治療法である。しかし時間的余裕が与えられない前に、戦争・内乱を迎えることは気持ちのいいものではない。

２８２　快楽・娯楽・享楽に対する我々の感受性が強い方が人々にとって愉快である。
快楽・娯楽・享楽に対する我々の感受性の程度の強弱は人々の愉快・不愉快に影響を及ぼす。快楽・娯楽・享楽に対する我々の感受性が強い方が人々にとって愉快である。スミスは、「われわれは若者の快活さに魅せられるばかりでなく、子供の遊び好きなことにさえも魅せられる。しかしながら、われわれは老人に非常にしばしば見られる活気のない無趣味な尊大ぶった態度に接するとすぐにいやになってしまう。」（訳書 p.517）と述べている。青年が年齢から見て自然にして妥当な快楽、娯楽、享楽に対して何らの関心を示さないときは、その青年は嫌われる。

２８３　快楽・娯楽・享楽に対する強すぎる感受性を道徳的適正感によって抑制できない場合、非難されるのは道徳的適正感の弱さである。
快楽・娯楽・享楽に対する感受性が強すぎることを道徳的適正感によって抑制されない場合、非難されるのは、快楽・娯楽・享楽に対する感受性が強すぎることではなくて、道徳的適正感の弱さである。

２８４　過大な自己尊重は自身にとって愉快であるが、他人にとって不愉快である。
自身にとって、過大な自己尊重は過小な自己尊重よりも気持ちがいい。つまり自身にとって、自身を高く評価することは愉快であり、自身を低く評価することは不愉快である。しかし、他人にとっては、事柄は全く異なり、自身を高く評価することは不愉快であり、自身を低く評価することは愉快である。

２８５　友人が上位に位置すると、我々自身の自己尊重は屈辱を感じる。
友人が上位に位置するようになると、友人の自己尊重のために我々自身の自己尊重は屈辱を感じさせられる。我々は自分自身の自尊心と虚栄心に促されて、友人の自尊心と虚栄心を非難する。

２８６　友人が第三者の下位に甘んじていると、我々は友人の臆病さを軽蔑する。
友人が第三者の下位に位置することに甘んじていると、我々は友人を非難するばかり

でなく、友人の臆病さを軽蔑する。

２８７　友人が第三者の上位に位置するようになると、我々の心を慰める。
　友人が第三者の上位に位置するようになると、我々は友人の行為を完全に是認しないとしても、我々の心を慰める。

２８８　道徳的適正を性格・行為の自己判断に用いるときは、善良な人といえども、失望したり、後悔したりする。
　最も厳密な道徳的適正と安全性といった標準を、功績の自己評価、性格・行為の自己判断に用いるときは、賢明な、善良な人といえども、尊大ぶったり、自負したりするための何らの根拠も見つけることができないで、かえって謙遜したり、失望したり、あるいは後悔したりするための莫大な根拠を発見する。道徳的適正は、自身の性格・行為ならびに他人の性格・行為の双方に対して観察を試みるうちに次第に形成されるものである。

２８９　世間において到達することのできる標準を性格・行為の自己判断に用いるときは、自身の不完全さを感じない。
　普通世間において到達することのできる、あるいは到達したことのある標準を、功績の自己評価、性格・行為の自己判断に用いるときは、第１に我々は標準よりも現実に上位にあるのか、下位にあるのかを感ずることができる、第２に自分の弱さや不完全さをほとんど感じない。世間において到達することのできる標準を用いる人は、節度を守らず、しばしば不遜の態度をとり、尊大で、自惚れが強く、また自身の絶大なる嘆美者であり、他人の絶大なる軽蔑者である。

２９０　有徳の士は自身の性格を道徳的適正に同化させようと努力している。
　有徳の士は、自身の功績を評価したり、自身の性格・行為を判断するにあたり、最も厳密な道徳的適正といった標準を用いる。有徳の士は自身の性格を厳密な道徳的適正といった標準に同化させようとして出来る限りの努力を払っている。

２９１　有徳の士は、普通に到達することのできる標準を用いて、自身が友人や知己より優位であると感じても、道徳的適正といった標準に照らして屈辱を感じる。
　有徳の士が、自身の功績を評価したり、自身の性格・行為を判断するにあたり、普通に到達することのできる、あるいは到達したことのある標準を用いるときは、有徳の士は自身が友人や知己より優位であると感じる。しかしながら、有徳の士は、友人や知己が普通に到達することのできる、あるいは到達したことのある標準を用いて自身が友人や知己より優位であると感じても、最も厳密な道徳的適正といった標準との比較によってはるかに著しく屈辱を感じる。

２９２　普通到達することのできる標準を志向するといった低い志しではなく、最も厳

密な道徳的適正といった標準を志向するといった高い志しをもたなければならない。
　普通到達することのできる標準を用いる人の性格は不適正であり、過度の自己称讃にもとづいて、過度の自負心を有している。普通到達することのできる標準を用いる人の過度の自負心は人々を眩惑させる。重要なことは我々の「志し」の問題である。我々は、普通世間において到達することのできる標準を志向するといった低い志しではなく、最も厳密な道徳的適正といった標準を志向するといった高い志しをもたなければならない。

２９３　上級の芸術家は理想的完全型と比較し自作品を不完全である、下級の芸術家は低級の芸術家の作品と比較し自作品を完全であると感じている。
　上級の芸術家は自分の作品を理想的完全型と比較し、自分の最上の作品といえどもつねに不完全であることを感じている。下級の芸術家は理想的完全型の概念をもつことなく、自分の作品をより低い等級に属する他の芸術家の作品と比較し、自分の作品にいつも完全に満足している。

２９４　賢明な人間は予期しない困難に襲われても決して驚いてはならない。
　賢明な人間はつねに自身の行為の道徳的適正を維持しなければならない。賢明な人間はきわめて突発的な、予期しない困難に襲われても、決して驚いてはならない。

２９５　愚かな拍手喝采の騒々しさは理解力を混乱させる。
　冷静な判断を下す人でさえ、一般大衆の絶讃を博した場合あるいは華やかさをもって誇示される場合、理解力を混乱させられる。

２９６　偉大な成功、偉大な権威を獲得するためには過度の自己嘆賞が必要である。
　偉人達は自らの偉大な功績によって有名になったというよりも、偉大な功績に全く釣り合いのとれないくらいの程度の自負心と自己嘆賞によって有名になっているので、偉大な成功、偉大な権威を獲得するためには、過度の自己嘆賞がある程度必要である。偉人達に親しく接して、偉人達を知り尽くした賢人達は、偉人達の過度の自己称讃を理解する。

２９７　自負心は、より真面目な心の持主ならば決して考えなかったにちがいない諸事業を行うのに必要である。
　自負心は、より真面目な心の持主ならば決して考えなかったにちがいない諸事業に従事させる上に必要であった。しかし、ひとたび成功すると、知らず知らずのうちに、つい狂気・愚昧と紙一重の虚栄に陥ってしまう。

２９８　不遜な自負心は、向こう見ずな、破滅的な冒険に身を陥れさせる。
　成功が世間から非常な好感をもって迎えられたならば、それは頭脳を狂わせて、不遜な自負心を抱かせる。不遜な自負心は、向こう見ずな、破滅的な冒険に身を陥れさせる。

２９９　成功すると、成功者のかつての軽挙・不正は感嘆の眼をもって眺められるようになる。
　人々が成功しているときは、公平無私なる見物人は成功によって眼を遮られ、成功者の計画における大きな軽挙ばかりでなく、大きな不正さえも見えなくなる。公平無私なる見物人は成功者の性格の欠点を非難するどころか、最も熱烈なる感嘆の眼をもって眺めようとする。

３００　失敗すると、失敗者のかつての英雄的な大度は愚昧とみなされるようになる。
　人々が失敗しているときは、公平無私なる見物人は、失敗者のかつての英雄的な大度をいまや途方もない軽率ないし愚昧とみなすようになる。

３０１　運は道徳情操に大きな影響を及ぼす。
　運（幸運あるいは不運）は道徳情操に大きな影響を及ぼす。

３０２　成功に対する感嘆は社会における秩序を確立するのに必要不可欠である。
　「成功に対する感嘆」と「富・権勢に対する尊敬」はともに社会における秩序を確立する上にひとしく必要不可欠である。

３０３　正しい節度ある美徳をもつ人は過度の自己評価をする人より称讃される。
　順境にあるときは、過度の自己評価をする人は正しい節度ある美徳をもつ人より称讃されるかも知れないが、万事が公平に計算されたあかつきには、正しい節度ある美徳をもつ人は過度の自己評価をする人より称讃される。

３０４　自らの功績以外のいかなる功績も自身の手柄にしない人はいかなる屈辱にもためらわない。
　自らの功績以外のいかなる功績も自身の手柄にしない人、つまり自分自身の性格のもつ純粋な真実性と確実性に自ら満足し、安心している人は、いかなる屈辱にもためらわず、いかなる発覚も恐れない。自らの功績以外のいかなる功績も自身の手柄にしない人は多数の無智な人の拍手喝采を受けることはないが、一人の賢明な人の賛美を受ける。

３０５　過度の自己評価をする人は賢者・友人に讃美されず、自らの虚栄心を尊敬しているようなふりをしている追従者を信頼する。
　過度の自己評価をする人は讃美されない。過度の自己評価をする人は、賢明な人々の評価を単なる悪意ないし嫉妬としか考えない。過度の自己評価をする人は、友人の評価に対して猜疑心を抱く。過度の自己評価をする人は、友人と交際することが不愉快になり、友人を面前から追い払う。また、友人の奉仕に報いるに忘恩をもってするばかりでなく、残虐と不正をもってする。過度の自己評価をする人は、自らの虚栄心・自負心を心から尊敬しているようなふりをしている追従者を信頼する。

３０６　「元気な、高潔な性格」の過度の自己評価は讃美される。
　我々は、世間の標準以上の偉大な、卓越した優秀性を備えているように見えない性格の過度の自己評価に対しては不快を感じるが、世間の標準以上の偉大な、卓越した優秀性を備えているように見える性格（スミスは「元気な、高潔な性格」と呼んでいる）の過度の自己評価に対しては、これを許すばかりでなく、これを移入し、同情する。

３０７　自負心の強い人は評価を得るために説得することをいさぎよしとしない。
　自負心の強い人は、第１に自分に満足しているので、自分の性格が修正を要するとは考えない、第２に心の底から自身の優秀性を確信し、自ら正しいと考えるところのものしか要求しない。自負心の強い人は自分の真価よりもはるかに高く自己を評価する人であり、他人がそれよりもなお一層高く評価してくれることを希望している。しかし、自負心の強い人は、他人に決して追従しない、また評価を得るために他人を説得することをいさぎよしとしない。

３０８　自負心は重苦しく、陰気な、激烈な情感である。
　自負心の強い人は、第１に他人に自分の優秀性を強いて感じさせることによるよりも、むしろ他人に他人自身の卑劣さを感じさせることによって、自分の見せかけの立場を維持しようとする、第２に他人をして自身に対する評価をさせることよりも、むしろ他人の自己評価に屈辱を感じさせることを希望している。

３０９　虚栄心は威勢のいい、陽気な、温和な情感である。
　虚栄心は、根拠のないにもかかわらず、威勢のいい、陽気な、温和な情感である。

３１０　虚栄心の強い人は自身の優秀性を確信していない。
　虚栄心の強い人は、他人から尊敬あるいは讃美してもらいたいという欲望をもっている。虚栄心の強い人は、第１に誠実味がなく、その心の底では、自分自身の優秀性を確信していない、第２に全然持っていないといっても全く差し支えない性質や業績を、当然もっているかのように嘘言を吐く。

３１１　虚栄心の強い人は追従してもらうために追従する。
　虚栄心の強い人は、第１に他人に対して、自分自身を眺めることができる色眼鏡よりも、もっとすばらしい色彩をもった色眼鏡を通して自分自身を眺めてもらうことを期待する、第２に最も熱心に精を出して、他人の評価を獲るように努力する、第３に追従してもらうために追従する。

３１２　自負心の強い人は虚栄心の強い人の金遣いの荒さに腹立たしさを感じる。
　自負心の強い人は、自らの尊厳を自覚しているので、細心の注意を払って自己の独立性を護ろうとし、無駄遣いしないようにする。したがって、自負心の強い人は、虚栄心の強い人の金遣いの荒さに腹立たしさを感じる。

３１３　自負心の強い人は尊敬していないより目下の人と交際する。
　自負心の強い人は、同じレベルの人と一緒にいるときは、常に必ずしも気安さを感ずるとは限らない、上のレベルの人と一緒にいるときは、なおさら気安さを感じにくいので、ほとんど尊敬していないより下のレベルの人、追従者、従属者と交際するようになる。

３１４　虚栄心の強い人は、不必要な自慢、根拠のない虚勢などを常用している。
　虚栄心の強い人は、不必要な自慢、根拠のない虚勢、不断の付和雷同、頻繁なる追従などを手段として常用している。

３１５　虚栄心の強い人は目上の者と交際しようとする。
　虚栄心の強い人は、上のレベルの人と交際するとある種の威光を反射してくれると考え、上のレベルの人と交際しようとする。また、社交界の人々、世論を支配すると思われる人々、才気縦横の人々、学者・名士と交際しようとする、

３１６　自負心の強い人の嘘言は有害で、他人を引き下げようとするものである。
　自負心の強い人は、嘘言を吐けば、その嘘言は、すべて有害で、他人を引き下げようとするものである。自負心の強い人は、自分を正しいものにするために身を屈してまで下劣な嘘言を吐こうとすることはないが、身を屈して嘘を言う場合には、その嘘は悪意のある嘘である

３１７　自負心の強い人は、他人に与えられた不当の優位性に対して憤激を覚え、他人に不利な噂の流布を喜ぶ。
　自負心の強い人は、第１に他人に与えられた不当の優位性に対して憤激を覚え、そのような人々を悪意と嫉妬をもって眺める、第２に他人にとって不利な噂が流布している場合、そのような噂を、しかもときおりある程度まで誇張さえして、繰り返すことを好む。

３１８　虚栄心の強い人の嘘言は悪意のない嘘である
　虚栄心の強い人の嘘言は、他人を引き下げるためではなくて、自分を引き上げるための悪意のない虚言である。

３１９　優位性が現実に存する場合には、自負心は尊敬すべき美徳をともなっている。
　我々は自負心を悪徳とみなし、嫌っているが、優位性が現実に存する場合には、自負心は誠実、高潔、高等の名誉感、最も不屈な勇気と決断というような多くの尊敬すべき美徳をともなっている。

３２０　虚栄心は愛すべき美徳を伴っている。

我々は虚栄心を悪徳とみなし、嫌っているが、虚栄心は、人間愛、丁寧、どんな瑣細な事柄でも世話を焼こうとする欲望、重大な事柄における真の寛容等のような多くの愛すべき美徳を伴っている。

３２１　自負心・虚栄心をもつ故に非難される人の地位は一般水準よりも下位に置かれている。

自負心の強い人と虚栄心の強い人はつねに不満を感じている。自負心の強い人・虚栄心の強い人の真の価値は一般水準よりもはるか上位に位置しているが、我々は自負心・虚栄心をもつ故に非難される人々の地位を一般水準よりも下位に置いている。

３２２　自負心・虚栄心はしばしば同一の性格の中に混在している。

自負心の強い人はしばしば虚栄心の強い人であり、逆に虚栄心の強い人はしばしば自負心の強い人である。つまり、自負心・虚栄心はしばしば同一の性格の中に混在しているので、我々は、虚栄心にともなう皮相な生意気な自慢が、自負心にともなう悪性の、また人を愚弄するような高慢と一緒になっているのを見る。

３２３　教育は虚栄心を指導して適正なる目標に向かわせることである。

教育の目標は虚栄心を指導して適正化させることにある。教育は、虚栄心の強い人に、くだらぬ業績について自己を高く評価させてはならない、また真に重要性をもつ業績に対する自惚れを失望させてはならない。

３２４　青年時代あまりに野心のなさすぎる人は不満足な老年時代を迎える。

青年時代あまりにおとなしすぎ、またあまりに野心のなさすぎる人は、味気ない、不平満々たる、不満足な老年時代を迎える。

３２５　不幸な人々の性格は卑屈である。

不幸な人々の性格は卑屈である。つまり、普通の水準よりもはるかに下位に立つ不幸な人々は、しばしばかれらが実際にそうであるよりもなお一層下位に自分を置くように思われる。

３２６　あまりに謙遜しすぎるよりは、いくらか威張りすぎることの方がましである。

自己尊重の情操においては、当人自身にとっても、あるいはまた公平無私なる見物人にとっても、ある程度の過大がある程度の過小よりも、はるかに不愉快ではない。

第６部の結論

３２７　我々自身の幸福に対する配慮は「慎慮」が、他の人々の幸福に対する配慮は「正義」「仁恵」がそれぞれ推薦される。

スミスは「慎慮」「正義」「仁恵」を３つの美徳と呼んでいる。慎慮は我々の利己的情操によって我々に推薦され、正義・仁恵は我々の利他的情操によって我々に推薦される。正義は我々を抑制して他人の幸福を侵害しないようにさせ、仁恵は我々を鼓舞して他人の幸福を促進するようにさせる。

３２８　憤怒が恐怖心によって抑制されている人は、憤怒の発散をもっと安全な機会に保留しているにすぎない。

憤怒が恐怖心によって抑制されている人は、常に必ずしも憤怒を放棄したわけではなく、単にその発散をもっと安全な機会に保留しているにすぎない。

３２９　慎重な考慮だけによって抑制される情感は以前の１０倍もの激烈さと狂暴性をもって爆発することがある。

道徳的適正感によって抑制される情感は、すべてある程度まで緩和され、征服される。慎重な考慮だけによって抑制される情感は、しばしば抑制されるためにかえって激化し、ときによると、以前の１０倍もの激烈さと狂暴性をもって爆発することがある。